お母さん

ぼくは、きづいたときから、まい朝ちゅうしゃをしています。
ぼくのちゅうしゃは、まいにち、お母さんがしてくれます。
お母さんは、ぼくが、４さいのときに、まいにちびょういんでれんしゅうをして、おぼえたそうです。
ぼくが、ふつうの人と同じように、生きていくには、かならずちゅうしゃをしなくてはいけません。うまれたときから、ずっとちゅうしゃをしているので、ぜんぜんこわくないけれど、やっぱりいたいです。
ぼくのうでは、いつも、ちゅうしゃのあとでいっぱいだけど、ちゅうしゃをすれば、みんなと同じように、はしったり、とんだりできるのでうれしいです。
おかあさんは、とてもこわくてきびしいけれど、今のぼくは、おかあさんがいないととてもこまります。

小さいころは、ぼくが、ケガをしたりするととてもやさしく手あてをしてくれたけれど、今は、ちがながれていても、
「じぶんのからだだよ。じぶんで、できることはじぶんでしなさい。お母さんがいないとき、だれがするの？」
といって、ほったらかしにされます。でも、いつのまにか、少しのケガなら、じぶんでおさえてなおせるようになってきました。だから、きびしくされてもへっちゃらです。
ぼくは、大きくなったら、じぶんでちゅうしゃをして生きていくことになるけど、おかあさんが、一人になってもだいじょうぶなほうほうを、たくさんおしえてくれているのでそれをわすれないように、またがんばりたいと思います。